

目黒寄生虫館月報

昭和34年7月10日発行・毎月1回10日発行

第5号

昭和34年7月

内 容

| | |
|----------------------------|---|
| 寄生虫の研究とチャンス(山下次郎)..... | 1 |
| 予研所長中村博士来館..... | 1 |
| Dr. S. Vajrasthira 来館..... | 1 |
| 昭和医大岩重博士来館..... | 1 |
| 寄贈をうけた標本..... | 1 |
| カツオの鉤頭虫について(木原緑)..... | 2 |
| ヤマカガシ, 鉤頭虫を放出(亀谷了)..... | 2 |
| 目黒寄生虫館建設記録(3)..... | 3 |
| 生物学同好会..... | 3 |
| パラサイト「ドクガの実態」..... | 3 |

寄生虫の研究とチャンス

山下次郎

なにか新しい寄生虫を見つけてやろうと意気込んでも、珍奇なものにぶつかるチャンスはなかなかない。研究は、得やすく、そして豊富な材料で行うのが得策だと言われていることももっともで、実際に珍らしくもない材料を用いて、今までわからなかった新しい事

柄が明かにされた例も多い。しかし人間はどうみても欲望のかたまりである。何かの研究をしながらも頭の片隅では、機会さえあれば人の手をつけたことのない新しい研究を虎視眈眈として狙っている。だが幸いそのチャンスに恵まれたからといって、その扱い方、研究の仕方がまずければ秀れた研究は生れてこない。だからこそ私たちはいつこういうチャンにめぐり会ってもこれを立派に扱いこなすだけの力を常に養っておきたい。それには平素いろんな寄生虫に接し、寄生虫についての広い知識を吸収し、よく消化しておくことだと思っている。(北大獣医学部教授 農博)

予研所長中村博士来館

6月26日予研所長中村敬三博士が来館され、標本の陳列方法などについて有益な指導を与えられた。

Dr. Surajra Vajrasthira 来館

6月15日バンコクの Dept. of Health の Dr. Surajra Vajrasthira は、東大石崎博士、予研安羅岡氏などの案内で来館された。これを機会に本館ではバンコックと標本の交換を行う予定である。

昭和医大岩重博士来館

6月28日昭和医大岩重毅博士が来館され、ドクガなど皮膚炎を起す衛生昆虫についていろいろと教授された。

東邦大伊藤教授ら参観

6月12日東邦大医学部伊藤隆太教授は学生一行とともに参観された。

公衆衛生院学生参観

6月18日公衆衛生院衛生技術保健指導科学生30名は、大西博士とともに参観された。

寄贈をうけた標本

6月には下記の諸先生から標本の寄贈をうけた。ここに厚くお礼申し上げる。

京都府立医大吉田幸雄博士

Paragonimus iloktsuenensis

予研安羅岡一男氏 *Schistosoma mansoni*

S. bovis

Pirenella conica

東京医歯大田中寛氏 *Strongyloides ratti*

予研朝比奈正二郎博士 *Euproctis similis*

工業技術院大山桂博士 *Bradybaena sieboldiana*

小倉曉雄氏 *Xanthochroa waterhousei*

Lymantria dispar

その他6点

日大伊藤正康氏 ヒシ

須磨水族館吉田啓正氏 クエの吸虫

予研岡見吉郎博士 ポーランドのハエ

(購入) *Omphalid lapidescens*

区内小学校理科会会員参観

6月17日目黒区内小学校の教員で組織する理科会会員20名が参観された。

カツオの鉤頭虫について

木 原 緑

カツオ *Katsuwonus vagans* (LESSON) の腸に寄生する鉤頭虫については、月報第3号「海産魚の鉤頭虫」でも少々触れたが、これまでに判明した寄生率その他に関してあらためて報告する。

カツオの解剖数は6月20日現在103尾、そのうち74尾(約72%)に鉤頭虫の1種 *Rhadinorhynchus katsuwonis* HARADA が寄生していた。

カツオ1尾についての *R. katsuwonis* の寄生数は最高16匹、最低1匹、平均すると3.3匹ということになるが、実際には1~2匹寄生しているものが過半数を占めている。

鉤頭虫の寄生率約72%に対して、他の寄生虫の寄生

率をみると、線虫類が約30%、条虫類が *Cyste* を含めて約18%、吸虫類が約9%、寄生性橈脚類が同じく約9%で、鉤頭虫の寄生率が圧倒的に高くなっている。

解剖する魚の種類がだいたい40種に限定されてしまっているし、解剖数もまだ少いので確実なことはいえないが、魚類で鉤頭虫の寄生率が最も高いのはカツオのように思われる。

これらの解剖したカツオの捕獲地は、千葉方面、水戸方面、三崎方面、伊豆方面、銚子方面にわたっている。

なお *Rhadinorhynchus katsuwonis* HARADA は鉤頭虫類の *Rhadinorhynchus* 科に属し、雌虫の大きなものでは3.5cmにもなる。頭部の *Proboscis* は比較的長く、したがって鉤の数も880ぐらいあるといわれている。生きているときは美しい赤橙色を呈している。

ヤマカガシ、鉤頭虫を放出

日曜の夜おそく、往診を終えて館をのぞくと、きまって実験台のビンの中にヘビが入っている。雪ヶ谷高校の小倉君が日曜ごとに郊外へ衛生昆虫の採集に行ってくれるのだが、そのついでに必ずヘビをつれてくる。1週間かかってやっと片づけておくと、また日曜には現われる。僕たちはうれしいのだが、ヘビには全く手こずるのである。

ところがきょう実験室に出掛けると木原女史が妙にソワソワしている。水漬けにしておいたヤマカガシがビンの中で3匹の鉤頭虫を放出したというのだ。女史の最も好きな鉤頭虫が、最も恐ろしいヘビから放出されてビンの中に沈んでいる。虫は欲しいがヘビには困るというわけで、女史はビンのまわりをため息をつきながら歩きまわっているのである。僕とてもヘビは苦手だ。蓋をとれば鎌首がとび出すだろう。心はあせるのみである。やがて一策を案じてビンを逆さにしてみる。案のじょうヘビはくると向きをかえて、ビンの底を盛んにつつく。僕はソッとビンの蓋をゆるめて水と一緒に虫を洗い出したのである。だが1匹は無残にもビンの蓋で潰されてしまった。しかしともかくも鉤頭虫は女史の手に渡ったというわけだ。(亀谷)

6月の短信

1日——NHK 社会課藤井潔氏、長岡昌氏、池田愛子氏来館。

3日——NHK 五百木氏来館。

5日——玉川大学入沢氏、百科事典編集の参考に参観。

6日——「寄生虫予防」第110号にパラサイト「私は具になりたくない」の写真入り記事が掲載。

9日——標本の寄贈(P. 1 参照)をうけるため、東京医歯大医動物学教室訪問(鈴木、木原)。

10日——パラサイト「ドクガの実態」準備で、昭和医大岩重毅博士訪問(木原)。

11日——カツオの鰓の寄生虫について水産大保科教授訪問(木原)。

16日——朝日新聞東京版と城北版に「出版して拡張費を」と題して本館の事業計画記事が掲載。

17日——小宮義孝博士来館。

22日——「ドクガの実態」準備のため予研衛生昆虫部長朝比奈博士を訪問(亀谷、野々部)。

23日——標本の寄贈(P. 1 参照)をうけるため予研安羅岡氏訪問(木原)。

目黒寄生虫館建設記録(3)

昭和28年5月12日、館の改装が終って一応陳列はしてみたものの、余りにも内容が貧弱なために、一般に公開する気にはなれなかった。まず内容の整備だ。時間の許すかぎり、足のつづくかぎり歩こう、と野々部君と2人で決意し、行動をおこした。なにしろ2人も相当忙しい本職をもっているのだから。

5月25日、野々部君は都下小平の家畜衛試を訪ねた。Bolbosoma, Setaria, Paramphistomum など18点を得て帰館した。

5月28日、野々部君とともに夜明けをまって芝浦屠場へ行った。次々とおとされていく牛の内臓がずらりと並ぶ。Fasciola hepatica, Eurytrema pancreaticum などの臓器標本や Setaria を得て、朝の外来患者の診察に間に合うよう急いで屠場を出た。ところが坂の途中でバイクが故障、標本を詰め込んだ石油缶をもて余したのであった。

6月2日、かねて依頼しておいた甲府の太田秀浄氏から各地のミヤイリガイが送られてきた。

6月5日、上野動物園に臓器の依頼をした。これは効果がなかったのは当然だった。中川志郎先生が厳然と控えておられるのを知らなかったからである。

9月5日、北研長野寛治博士から来訪の電話があった。私たちはおおいに喜び手の舞い足の踏むところを知らずという工合であった。いそぎ応接セットをそろえ、一同集まってお迎えする。博士は「誠意をもって

遂行すれば必ず成る」と励まされた。私たちはおおいに意を強くし、一層の努力を誓ったのである。

9月27日、石浜光君が助手として着任した。そして館の完成に協力する決意を表明したのは頼もしかったが、事情あってまもなく袂を分かつにいたったのは残念であった。

10月14日、井上征五郎氏から Echinococcus unilocularis の臓器標本など数点が送られてきた。

10月16日、目黒保健所からイエネズミとドブネズミ76頭を貰った。石浜君と2人で毎日解剖した。Hymenolepis diminuta, H. nana, Cysticercus fasciolaris などを多数採集することができた。

10月22日、故郷からツグミが送られてきた。Haploparaxis dujardini をとったのはこれである。

11月8日、親友であり寄生虫館のよき助言者であるI氏の皮膚から Cysticercus cellulosae hominis を畏友武居医師の手で摘出してもらう。

こうしてひとつひとつ標本は増加して118点となった。

(亀谷)

生物学同好会

6月27日(第8回)下目黒小学校で福井玉夫博士が動物分類学「節足動物」の講義をされた。

7月19日に逗子海岸で採集会を行う予定である。

(野々部)

月例展示・パラサイト第3回

7・8月『ドクガの実態』

内 容

1. パネルによる解説
2. 発育史の実物パノラマ
3. 各種のドクガ
4. 臨床症状
5. カブレを起す衛生昆虫

学者によればドクガの大流行は8年を周期としているという。昭和30年に全国的流行があったから、今年は流行の谷に当るわけだ。ところが実際にはドクガは多発しており、臨床家もドクガその他の昆虫によるカブレが多いという。このような衛生昆虫の知識を普及させるために、予研衛生昆虫部(部長朝比奈正二郎博士)、昭和医大岩重毅博士の協力を得て「ドクガの実態」の展示を行う。